九州産業大学国際文化学部紀要　第22号　31－46（2002）

アルゴリスにおけるポリス成立をめぐって
―― 学界の動向と今後の展望 ――

安　永　信　二

はじめに

暗黒時代が明けようとしていた前8世紀は，ミケーネ文明の崩壊以来停滞気味であった文化が再び興隆したことから「ギリシア＝ルネサンス」と呼ばれている。この時期，オリンピア競技の開始，アルファベットの導入，吟唱詩人の活躍など，後のヨーロッパ文化に多大な影響をもたらすことになる新しい文化が芽生えた。なかでも注目すべきはポリスが発生したことである。

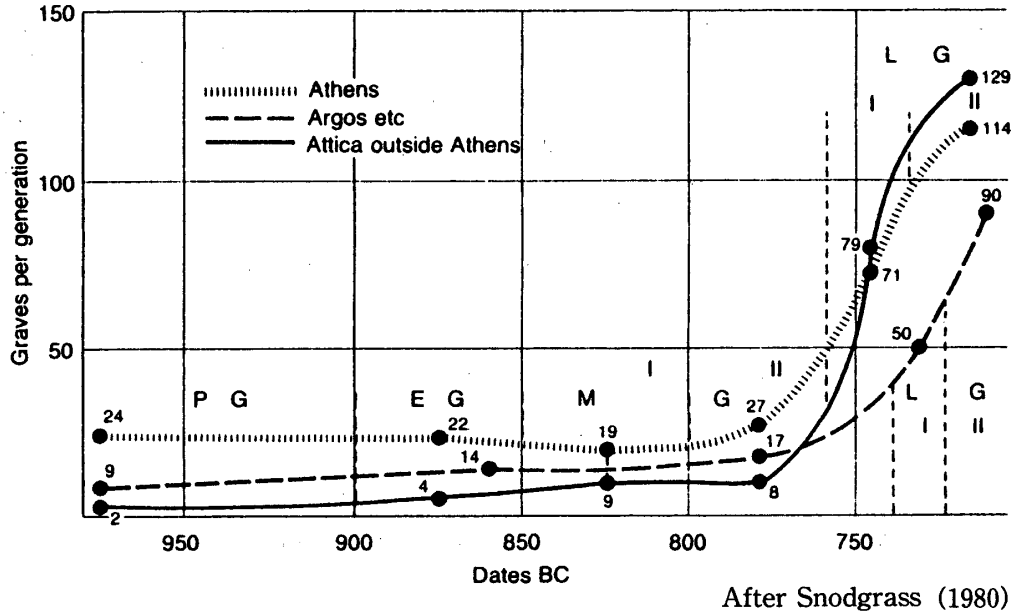
前8世紀はギリシア文化の幕開けという点で非常に重要な世紀ではあるが，いかなる時代背景のもとにポリス共同体が誕生したのかという問題をめぐって，研究は困難をきわめている。困難さの第一は同時代の文字史料が存在しないことである。ミケーネ時代に使用されていた線文字は完全に姿を消し，アルファベットが普及し始めるのは前8世紀よりも後になってからのことであった。このためしばらく前まで，研究者はホメロスやヘシオドスの叙事詩あるいは暗黒時代から数百年も後に書かれた文献をもとにこの時代の様相を推測するしかなかった。第二の問題は，考古学史料が決して豊富とは言えないことである。ミケーネ時代と古典期にはさまれた時代であるため世界の注目を浴びる遺跡や出土品に乏しく，軽視される傾向もあった。しかし20世紀後半から活発化した考古学調査によって，今では「暗黒」とは言いがたいほどの成果が得られるようになっている。しかし，これこそが第三の難問に結びつく。文献史料で得られるイメージと考古学調査の結果とに，大きなギャップが生じたのである。このギャップは，文献を重視する歴史学者と，出土史料のみを信頼する考古学者との間に対立や反目を表面化させることもあった。近年，この軋轢は次第に解消されつつあるものの，両者の描く時代像にはいまだに大きな隔たりがあることは否めない。また出土史料が次第に充実するにつれて多様な解釈も可能となり，いくつかの論争も展開されるようになってきた。

そこで本稿では，ペロポネソス半島のアルゴリス地方を中心に，ポリス成立に関してこれまでに出された主たる見解を整理し，今後の研究がどうあるべきかについて考察してみることとする。

I　人口の増加・集住・都市化

ポリスが成立する必要条件の一つに，人口の増加とそれにともなって生じ得る集住と集落の都市化が挙げられる[1]。これを具体的な数字によって証明しようとしたのがスノッドグラスであった[2]。彼は，アテネ市域，アッティカ地方，アルゴリス地方で発見された墓の数を世代（30年）毎に分類した。そしてアテネ（市域とその他のアッティカ地方）では前750年前後，アルゴリス地方ではそれよりもやや遅れて急速に増加しているグラフを示し（下図），前８世紀後半にこれらの地域で人口が爆発的に増加したとの見解を出したのである。彼の説はポリス成立を解明する大きな証拠として注目されたが[3]，すべての研究者に受け入れられたわけではない。墓数が急増したことは事実にしても，死者が増加したのか，それとも墓制が変化したためかという疑問が生じるし，考古学調査に常につきまとう危険性すなわち偶然性ということも考えられるからである。事実，スノッドグラスの人口急増説は，キャンプによってただちに反駁された。彼はアテネのアゴラで発見されたジオメトリック期の井戸30本を精査し，その多くが前８世紀末に廃棄されていること，またこのころ掘られた井戸２本は異常なほどに深く掘り下げられていることの二点から地下水位の低下を想定し，墓数が急増したのは飢饉と疫病が蔓延した結果であると推測した。彼はヒュメトス山にある天候神ゼウスの神域にこの時期夥しい数の奉納品が捧げられていることと，前７世紀に墓数が減少していることを傍証史料として挙げ，スノッドグラスとは真っ向から対立する説を打ち出したのである[4]。

〔前950―前700年の墓数の推移〕



After Snodgrass (1980) Fig. 4

この両者をモリスは痛烈に批判した[5]。彼は①時期毎の葬制の変化，②遺骨を10歳未満の子どもとそれ以上の成人とに分類，③埋葬母体数を数式を使って割り出した上で，暗黒時代からアルカイク期にいたる時代背景を概観した。そして前8世紀半ばまでは子どもが墓に葬られることは少なかったこと，また成人の一部（貴族層＝agathoi）のみが墓に葬られていたという結果を得，墓の数がこの時期に急増するのは平民（kakoi）たちも墓を得たためであるとしてスノッドグラスの「急増」説を否定した。またキャンプの論については，史料の扱い方が根本的に誤っていると指摘してこれを排除している[6]。

モリスは一部のポリスがagathoiとkakoiの対立抗争の中で成立したとの見解から墓数の変化を説明したのだが，その解釈よりもむしろ墓数の分析のほうが脚光を浴びてしまい，慎重論を浮上させる結果となった。そして，人口増加率を極端に低く見る考えも出された。ジョーンズは，スノッドグラスが出した年間3.2〜2.8％という数字は20世紀後半の発展途上国のそれに匹敵するほど異常なものであり，古代社会にはありえないという考えから論を進め，人口統計学的立場から前8世紀の人口増加率はアッティカが0.79％，コリント0.40％，アルゴリスは0.31％との数字を出している[7]。

一方，前7世紀に墓数が減少している原因の究明はいまだにほとんどなされていないのが現状である[8]。オズボーンはこの点に関し，前7世紀に入ると人々の死者に対する観念と墓制の変化によって発見される墓が減少したとの意見を発表したが，決して説得的な論考とは言いがたい[9]。

このように前8世紀から前7世紀にかけての人口の推移に関する結論は出されていない。しかし，いまではキャンプの説に従う研究者はほとんどなく，またスノッドグラスの飛躍的増加を前提とする考えも少なくなり，人口は微増したという慎重な立場をとるのが一般的となっているようである[10]。

キャンプの説がまったく支持されなかった理由の一つは，前8世紀に居住地域が各地で拡大していったという現象が見られたからである。フォリーは1988年に，初期鉄器時代のアルゴリスに関するきわめて綿密な研究を公表した。彼女の報告によれば，ミケーネ文明が崩壊した直後にはアルゴリス地方にはアルゴス・ミケーネ・ティリンス・アシーネ・レルナ・ナウプリアの6箇所しか居住地として確認できないが，前8世紀はじめには4箇所，後半に入るとさらに8箇所が新たに居住地となった[11]。この現象はアッティカにも見られ，前9世紀ころからヴァリやトリコスなどの内陸部に集落が形成されている。他ポリスが海外に植民活動を行っていたこの時期，アッティカではポリス内植民があったとみなす研究者は多い[12]。

また集落の移動も見られた。たとえばパロス島のククナリエスでは，北部の町ナウ

ーサの近くに位置する丘の傾斜地に居住地とアテナ神殿が設けられていたが，前8世紀末，戦災等の形跡がないにもかかわらず神殿を残して集落が放棄された。旱魃の可能性も否定できないが，後にポリスとなるパロス（パリキア）に移動したのではないかと考えられている[13]。またアンドロス島のザゴラでも海抜160m余りの丘の上に前800年より前に集落が作られたが，前700年前後に放棄された[14]。これらがシノイキスモスによるものか，それともギリシア世界が安定して利便性の高い地に移動したためであるかははっきりとしないが，前8世紀にギリシア世界全体で集落の統合，移動あるいは完全な放棄などの現象が生じたのは事実である[15]。

II　神域の出現

現存する神域の多くが作られたのもこの時期であった。ただし，ミケーネ文明が崩壊してからこのときまで，信仰や祭祀活動がまったくなかったわけではない。暗黒時代のきわめて早い時期から集落の首長(basileus)たちの家が祭祀の場となっていたとの説がマザラキス＝アイニアンによって出されたが，おそらくその通りであった[16]。一方クレタ島のカト＝シミ，イダ山洞窟，ディクテー洞窟，アムニッソスの（エイレイテュイアの）洞窟など，一部の山頂神域(peak sanctuary)と洞窟神域(cave sanctuary)では，ミノア時代からほとんど中断することなく奉納品が捧げられていた[17]。また，クレタ南岸のコモスで発見された神殿は前11世紀終わりころフェニキア人が建立したものとされている[18]。

クレタ以外のギリシア世界でも早くから，やがて林立するようになる神域の原型がすでに存在していた。サモス島のヘライオン（ヘラ神域）に設けられた祭壇は前9世紀あるいはそれ以前[19]，さらにオリンピア，アッティカのヒュメトス山，アルゴスのヘライオン，コリントのペラホラ，エレトリアのアポロン＝ダフネフォロス[20]なども前800年以前に遡ると考えられている。しかし暗黒時代にこのような独立した神域は少なく，前8世紀に入ってから数多くの神域が設けられ，一部には神殿が建立されるようになった。

前述したように，神域は前8世紀になって突如として出現したのではなく，首長の家屋が果たしていた祭祀の場としての役割が消滅し，それに代わって神が独立した土地（神域）を獲得するようになったのである。しかし，信仰や祭祀活動が暗黒時代初期から古典期にいたるまで連続性を有していたと主張することはできない。前8世紀に始まる供物奉納という新しい風習はまたたく間にギリシア全土に広がり（次ページ表），これに呼応するかのように各地に神域がつぎつぎと形成されるようになった。こ

の事態は首長が独占していた祭祀が一般民衆に開放されたことを意味する。すなわち神と人との関係が，前8世紀を境として大きく変わったのである。

〔各神域出土の青銅ピン〕

Sanctuary	*Sub-mycenaean and protogeometric (c.1050-850)*	*Early to late geometric (c.850-700)*	*Late eighth and early seventh centuries (c.725-650)*	*Archaic (c.700-500)*
Perakhora	0	38	9	78
'Argive' Heraion	2	699	279	388
Lousoi	0	3	5	23
Olympia	7	58	29	225
Tegea	0	273	243	50
Artemis Orthia	0	133	926	403
Menelaion	0	2	17	41

after Osborne, R. (1996) Table 3

この変化は首長による祭祀の独占が廃されて共同体が祭祀行為の主体となったと解されており，それゆえ独立した神域の出現をポリス誕生のメルクマールとみなす研究者は多い(21)。ところがかならずしもそうだと断言できない点もある。神域は，居住地（ポリス）内にできた神域（ここでは「中心神域」と呼ぶ）と，ポリスの中心からかなり離れた場所に設けられた神域（同「辺境神域」）の二種類に大きく分けられる。前者はポリスの象徴的存在として，やがて壮大な神殿が建立されることになり，ポリスと一心同体的に発展をしたものが多かった。これに対して後者の辺境神域は，無論神殿が建てられることも多かったが，ポリスから数キロ（あるいはそれ以上）離れた人里離れた杜，泉，洞窟などを含む土地が割り当てられた。これら辺境神域とポリスの成立や発展との関係をいかに考えるかによって，ポリス誕生に対する神域出現の意味が変わるからである。アルゴスとその近くにあるヘライオンとの関係についての解釈も，その一例と言えよう。

アルゴスのヘライオンはアルゴス市から北へ8キロほど行ったところ，ミケーネ寄りではあるが，アルゴスとミケーネそれにティリンスの中間に位置する辺境神域である。前10世紀の青銅のピンがここから出土しているが，神域として成立したのは前9世紀もしくは前8世紀初めころかと思われる。ここに最初に作られたモニュメンタルな建造物は，古神殿の基礎とされた大テラスで，これは“キュクロペス式”を模した巨石が一部に使われており，その建造年代は論争の的となっている(22)。ヘライオンは全ギリシア的な神域に発展することはなかったものの，ギリシア各地からの参詣者があり，アルゴリスの象徴的存在であった。

III 前8世紀末のアルゴスとポリニャックの理論

アルゴス[23]に関する文献史料は多い。英雄伝説では，オイディプスの息子たちエテオクレスとポリュネイケスの王位をめぐる争いで二度にわたるテバイ攻めを行った国として描かれ，また『テバイ攻めの七将』の一人テューデウスの子でトロヤ戦争に参加したディオメーデースは主人公のアキレウスやオデュッセウスに匹敵するほど『イーリアス』に頻繁に登場している。歴史時代に入ってからも，アルカイック期以来スパルタと絶え間ない抗争を繰り返し[24]，アシーネを陥落させ[25]，フェイドンがアルゴスの諸制度を制定してオリンピア競技を主宰した[26]など，伝説時代から常にギリシア屈指の強国の一つに数えられてきた。こうした史料が多いために，研究者はアルゴスが強大な勢力を持つポリスであったという先入観を抱きがちになってしまう[27]。実際，考古学調査の結果もそれを裏づけるものばかりであった。

20世紀前半にスウェーデン考古学隊によってアシーネの調査が行われた。その結果，アシーネは前8世紀末に破壊された痕跡があり[28]，その後ヘレニズム時代までほとんど人の居住が認められないことがわかった[29]。またアシーネの集落跡近くにあるバルブーナの丘の頂上には建築物の遺構が発見され，アポロン＝ピュタエウスの神域と目されている[30]。これらの調査結果は，パウサニアスの記述と完全に一致するものであった。

一方アルゴス市内もフランス考古学隊が調査を進め，現在のアルゴス市のほぼ真下に古代の町が建設されていたことが判明し，また標高276メートルの山ラリサ(アルゴス市内から車で10分弱)の頂上と，アスピスという標高100メートルほどの小高い丘からはパウサニアスに記された神域や神殿の一部が発見されている。また市内で，とくに副葬品として遺体とともに埋められた前8世紀の武具一式がほとんど完全な形で1950年代に見つかったことは，当時のアルゴスに富裕な戦士層が存在していたことをうかがわせる証拠として大きく注目された[31]。

これらの調査結果を受けて，前8世紀後半のアルゴスの様子がかなり鮮明に把握されるようになった。第一にアルゴスでは，市域内での人々の居住区域が前8世紀に拡大し，世紀後半には現市域の南西部（古代アゴラとローマ時代の劇場近辺）から，それより1キロほど北東部にある現在のプラティア（広場）を越えて広がっており，およそ東西1キロ南北2キロ余りという現在の町とほぼ大きさにまでなっていた[32]。第二に多くの神域が市域内に設けられたことである。アルゴスの守護神はアポロン＝リュケイオスであるが，現市域内にあって神殿の大部分が破損されているため，場所の

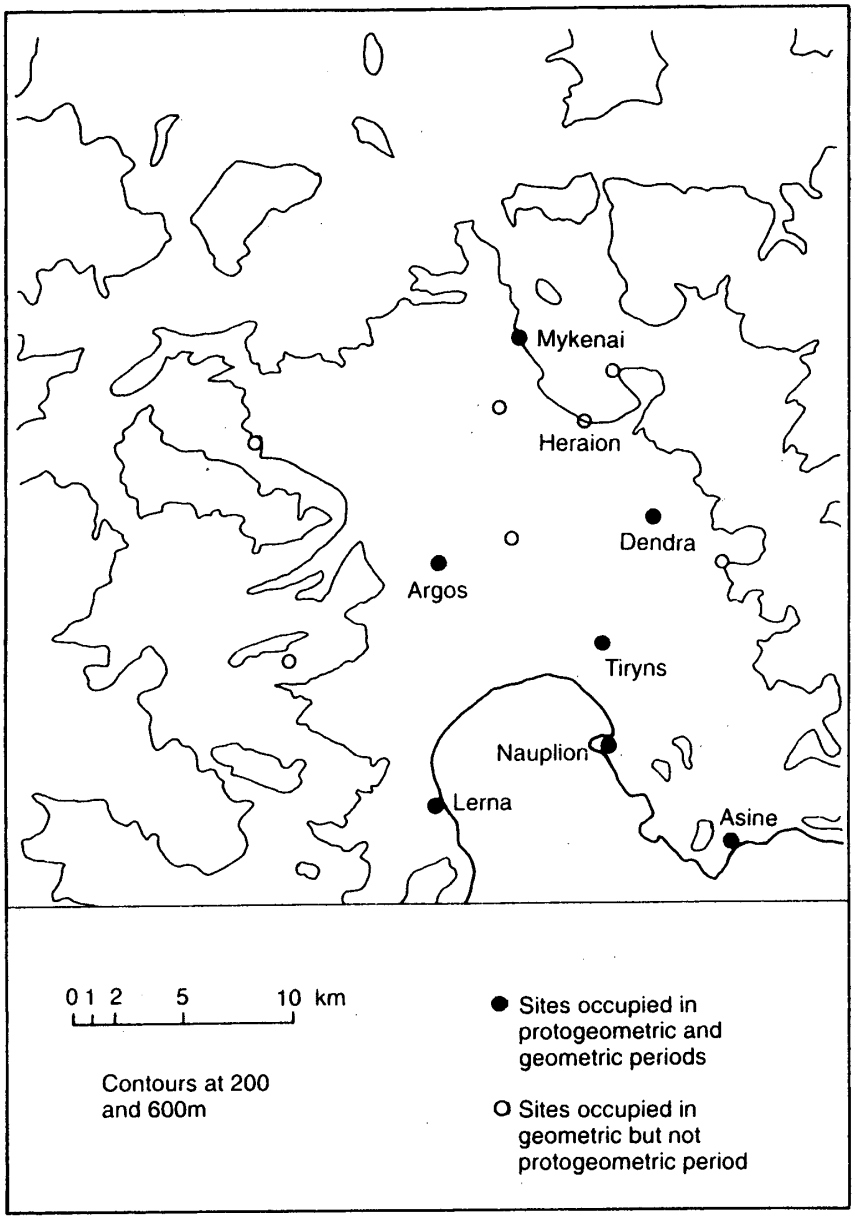
特定もままならない状態である。またパウサニアスによればラリサには3つの神殿が建立されていたが，中世の城壁内部に基礎の一部が残っているのと，前8世紀半ば以降の土器片が発見されているだけで，どの神殿か特定することはできない[33]。アスピスにはアポロン神殿とアテナ神殿の2つが建立されていたことがパウサニアスに記録されており，アポロン神殿の基礎（岩盤）を目にすることができる[34]。これらの神域が設けられた年代の詳細は不明であるが，きわめて古い時代からの奉納品が発見されたラリサの頂上を除けば，おそらくアルゴスの町の拡大と同時期だったものと思われる。第三に墓制が変化し，高価な副葬品を持つシスト墓（石の平板を組み合わせた個人墓）に埋葬される者と，ほとんど副葬品のないピトス（甕棺）墓に葬られる者とに分かれるようになっていた[35]。この分化は貴族と平民の別ができていたか，あるいは貧富の差が歴然としたことを意味する。

さてこのようにアルゴスの考古学調査が進むにつれて，ポリス成立期のアルゴス像が次第に描かれるようになったが，大胆な説を打ち出して学界に大きな影響をあたえたのがポリニャックであった[36]。彼はまず神域を，それらが設けられた場所に応じて中心神域・市域周辺の神域・辺境神域の三種に分類し，辺境神域は「地のはて（“bouts du monde”）」と考えられていたと定義づけをしたうえで，つぎのように論を進める。辺境神域にはサモス・コリント・アルゴスのヘライオン，オリンピア，イストミアなどが含まれ，それらは異なる集落や人間たちの交流の場所であった。しかし前8世紀終わりころから領土争いが始まってくると辺境神域が争いの的となり，アルゴス平野ではヘライオン争奪戦という形であらわれた。このころすでに都市を形成していたアルゴスは，ドリュオペス人の町であったアシーネを攻撃破壊し，これとほぼ同じころヘライオンに大テラスを造営して平野全域に対して覇を唱えた。辺境神域はこうして領土の境界線を成すとともに，ポリスの中心神域と強い結びつきを持つようになったのである（la cité bipolaire）。

ポリスの成立と辺境神域を関係づけたこのポリニャックの説は“extra-urban”理論と呼ばれ，前8世紀末アルゴスの勢力を大きく評価していること，そして辺境神域にポリスの成立発展と重大なかかわりを持たせている点が特徴である。そしてこの論が出されると，スノッドグラスの人口急増説，それに文献史料や考古学史料とも合致しているため，一部で批判されたにもかかわらず[37]，学界に多大な影響をあたえた[38]。

こうしてポリス成立期の全体像がほぼできあがったに見えたのであるが，彼の説はストレームとホールによって根本から否定されてしまうことになる。

〔前10—前8世紀のアルゴリス〕



after Osborne, R. (1996) Fig. 17b

IV ストレームとホール

ポリニャックの理論の一角を崩したのはストレームであった。彼女は「三部作」と呼ぶに相応しい論文を1988年，1995年，1998年に発表した。まず第一論文では，ヘライオンの大テラスと古神殿の建立年代と両者の関係をあらためて検討し，大テラスの建造は前700年以前，また古神殿はテルモンのアポロン神殿（前640-前620）やイストミアのポセイドン神殿（前650年前後）などよりも古い時期に作られたとした。そしてヘライオンとアルゴス市内の建造物とを比べたとき，規模・構造・年代に歴然とした

隔たりがあることを指摘して，アルゴスによる大テラス建造の可能性を否定したのである[39]。

さらに第二論文において彼女はヘライオンで出土した青銅製品の分析を行い，以下の結論を得た。①ヘライオン出土の青銅製品は，ラコニア，アルカディア（とくにテゲア），コリント，中部ギリシアおよびテッサリア，マケドニアのそれと類似するものが多く，これらの地域から巡礼者があったものと思われる，②出土品が製造された地域を見ると，ヘライオンがコリントや中部ギリシア東部に向かって開かれていたのに対し，アルゴスは南部あるいはアッティカとの交流があった，③アルゴス出土の副葬品はヘライオンの奉納品とは大きく異なっており，アルゴスの貴族層がヘライオンに詣でることはなかった，④後期ジオメトリック期になるとアルゴスとヘライオンとの関係はそれまでよりも密接にはなるが，その度合いは決して高くはない，⑤ヘライオンへの奉納品にはプロト＝ジオメトリック期から初期ジオメトリック期の青銅ピンが含まれており，神域としては前9世紀かそれ以前から存在していた。

このように，アルゴスとヘライオンは8キロしか離れてないにもかかわらずその関係は希薄なものであり，前8世紀終わりまで両者にはほとんど接点がなかったとして，第一論文を強化したのである[40]。

彼女の第二論文と同じ年，ホールはAmerican Journal of Archaeologyの中でポリニャックを根本から否定する論文を発表した[41]。彼の論旨を箇条書きにまとめてみるとつぎのようになる。

①アルゴスによるアシーネの破壊は，領土拡張ではなく海賊討伐がその目的であった[42]。

②アルゴスがアルゴス平野一帯に勢力を伸ばすのは前5世紀であり，それまでミケーネ，ティリンス，ナウプリアは独立した共同体を保っていた[43]。

③デルフィに奉納されたアルカイック期作製の二体のクーロス像（現デルフィ博物館蔵）は，ヘロドトスに記されたクレオビスとビトンとされてアルゴスからヘライオンまでの行進を示すものと考えられていたが，これは彼らではなくカストールとポリュデウケス（ディオスクーロイ＝「ゼウスの息子たち」）である。

④ヘラ信仰はアルゴス固有のものではなく，ティリンスやミケーネでも崇拝されていた。なおアルゴス市の守護神は，ヘラではなくアポロン＝リュケイオスである。

⑤ヘライオンとミケーネを結ぶ道には，「テラス神域」と「アガメムノネイオン」があるが，これらはヘライオンの副次的存在として建立された祠であり，ヘライオンはミケーネと大いにかかわりがあった[44]。

⑥前6世紀前半のヘライオン出土の碑文は，アルゴス方言ではない。

⑦フェイドンは，スパルタのリュクルゴス同様，伝説的な人物。
以上の点から，アルゴスは前5世紀半ばまでイナコス川を国境線とする領域的には小さなポリスであり，文献史料に記されているアルゴスの強大さはレスボスの伝承作家ヘラニコスが大いにかかわった後世の捏造だと考えたのである。

ポリニャックの論に対して出されてきた部分的な批判は[45]ストレームとホールの論文に集約されており，現在では「extra-urban理論」は根底から覆されたと見るべきであろう。しかし，ホールの意見がすべて正しいと言うことも難しい。その第一はヘライオン大テラスの造営についてである。ホールは大テラスの造営をミケーネとかかわりがあるかのように書いていながら結局はことばを濁しているのだが，前8世紀末のミケーネはきわめて小さな集落であり[46]，大土木工事をするほどの力があったとは考えられない。言い換えれば，大テラスを作ったのがアルゴスでなければ，いったいだれが何の目的で作ったのかという疑問が新たに生じるのである。大テラスは，無論エジプトのピラミッドなどとは比較にならないが，ヘラ信仰者たちによる共同作業という程度の組織によって作られたということはあり得ない。第二は伝承の点について。『イーリアス』ではアルゴスはミケーネ，ピュロス，スパルタなどと並ぶ王国として表現されているが，ミケーネ時代のアルゴスはわずかにアスピスに居住地が発見されているだけで，決して王国などと呼べるような存在ではなかった。ホメロスはテーマをミケーネ時代末期に求めながら，その内容の多くは前10〜前9世紀のものであることがフィンリーによって指摘されている。筆者はさらにホメロスが活動していた時代（前8世紀終わりころ）に自分で見聞きしたことも盛り込まれていると考えているが，もしそうであるならばアルゴスはホメロスの時代にかなり大きな富と力を有していたと思われる。もしかしたらアルゴスの貴族たちは聴衆となってホメロスの詩に聴き入っていたかも知れない。ホメロスはアルゴスが強大な勢力を持ち，自分のパトロンの一つだったからこそ，ディオメーデースを頻繁に登場させていたのではあるまいか。また，ヘラニコスはヘロドトスとほぼ同世代の人物である。もしヘラニコスがアルゴスの依頼によって古代の歴史を塗り替える伝承を作ったとしたら，ヘロドトスは必ずや疑念を抱いたはずであろう[47]。

このようにホールの説は，ポリニャックが構築した前8世紀末のアルゴス像を瓦解させるのに十分な理論と史料を提示したが，ポリニャックに替わる新たな全体像を描き出したとは言い難い。

V　今後の展望

ホールは，ポリスが成立するのは共同体成員の同一性と，他とは異なるという意識が芽生えたときに生じるものと考え[48]，居住地域内に周囲にはない独自の祭祀・守護神を構えたときがポリス成立の時期であるとした。また共同体の独自性は言語（方言），文字，神話などにも反映され，共同体の個性（ethnicity）の違いとなってポリス意識が強化されるとの論を推進している[49]。共同体個性がいつごろどのようにして芽生えたのかを追跡することが可能であれば，ホールの理論はポリスの成立ひいてはギリシアの閉鎖性を理解する決定的な手がかりとなることは間違いない。しかし，古典期のそれは追究できるものの，前8世紀にまで遡らせることはきわめて困難かと思われる[50]。無論，そうだからと言ってこの作業が無駄になるなどということは決してない。ギリシア研究者たちがまだ手探りの状態でポリス成立期に取り組んでいる現在，あらゆる可能性を追求する努力を惜しまぬことこそ必要不可欠である。この意味で，ホールの研究成果がギリシア史研究の画期となるかどうかを，しばらく見守らなければならない。

一方冒頭に述べたように，考古学的成果が上がるにつれて文献史料から得られる知見との間に大きなギャップが生じるようになったことは，注意すべき点であると同時に，今後大きな期待が持てるところでもある。ギャップの生じた原因が奈辺にあるかを探ることができれば，一気に解決する可能性も残されているからである。現時点ではまだ考古学史料が満足な状態とは言えず，これも将来に託さざるを得ないのだが，すでに神域や祭祀活動についてはある程度充実した出土史料が得られている[51]。これらの史料を丹念に検討分析していけば，歴史的解釈は十分に可能なはずである。事実ヘッグらによって祭祀の研究はさかんに行われており，学界に多大な貢献を為しつつある[52]。ストレームの第三論文もその一つと言えよう[53]。これは第二論文の続編で，ギリシア外から入ってきた青銅製品の分析を行ったものである。彼女はアルゴスのヘライオンに奉納された青銅製品にはイタリア，エジプト，アッシリア，小アジアのフリギアからの輸入品が含まれており，とくにフリギア製もしくはその模造品が多いという特徴を見出して，単なる物品にとどまらず祭祀活動の一つであるシュンポジオン（祭祀活動としての共同食事）の風習がフリギアからペラホラやアルゴスのヘライオンにもたらされたのではないかと指摘した[54]。ギリシアの精神活動に対するオリエントの影響はすでに何度も言われてきたことである[55]。しかしこの論文は，ポリス成立と大きく関わる神域および祭祀活動に対する東方世界との直接的な関係を，あらためて凝視する必要性を訴えたストレームの問いかけではないだろうか。

＊筆者は，2000年9月から一年間，大学の派遣でギリシアに留学する機会にめぐまれた。十分な成果があったかどうかは別にして，長期にわたって海外で生活するという貴重な体験をさせていただき，また久しぶりに外国の研究所に入って国際的な学問の雰囲気を味わうことができたことはたいへんに有意義なことであった。海外留学を快諾された森田明前学部長，学部の先生諸氏，学部事務室，また学長をはじめとする大学関係者の方々，それに研究に関してさまざまな便宜をはかってくださったBSA(イギリス考古学研究所)の皆様に紙面ながら心から感謝する次第である。本稿はその研究成果のほんの一部であり，今後も随時報告させていただくつもりである。

注

(1) Plut. *Thes*. 24; Thouk. II-15; Snodgrass, A. *Archaeology and the rise of the Greek state- An Inaugural Lecture*—Cambridge (1977)；コリントの集住と都市化については，Salmon, J.B. *Wealthy Corinth -A History of the City to 338 B.C.-* Oxford (1984) 58ff. ; Williams, C.K. "The Early Urbanization of Corinth" *A.S. Atene* 60 (1982) 9-20. ポリスの形成にかならずしも集住は必要ではないと考える研究者も多い。また集住が行われたと思われるポリスについても，地域によってその年代は大きく異なると考えられている。

(2) Snodgrass, A. *Archaic Greece -The Age of Experiment-* London (1980) 20-24.

(3) *e.g.* Sallares, R. *The Ecology of the Ancient Greek World* N.Y. (1991) 128ff. ; See Morris, I. *Archaeology as Cultural History* Malden (2000) 98f.

(4) Camp, Jr. J. McK. "A Drought in the Late Eighth Century B.C." *Hesp*. 48 (1979) 397-411. これに対するSnodgrassの反論は，Snodgrass, A. "Two Demographic Notes" in *The Greek Renaissance of the Eight Century B.C.* Ed. by Hägg, R. Stockholm (1983) 169-71.

(5) Morris, I. *Burial and ancient society -The rise of the Greek city-state-* Cambridge (1987) 72ff.

(6) *ibid*. 160f.

(7) Jones, D.W. "The Conundrum of Greek Population Growth in the 8th Century B.C.: Burials, Settlements, and Wells" *Op. Ath.* 24 (1999) 25-50.

(8) スノッドグラス (1983, 170) は，"it is a question which had already been puzzling me, and to which I am not yet ready to offer any answer." と，この問題に対する解決を見出していない。モリス (1987, 109) は，前8世紀半ばまでと前700年前後から前6世紀終わりまでの二つの時期，アッティカではきちんと葬られなかった者たちがいたためだと考え，モーガンとウィットロー (Morgan. C & Whitelaw, T. "Pots and Politics: Ceramic Evidence for the Rise of the Argive State" *A.J.A.* 95, 1991, 94f.) は，モリスの説を支持しながらも人口の移動があったことを示唆している。またフォリー (Foley, A. *The Argolid 800-600 B.C. -An Archaeological Survey-* Göteborg, 1988, 30, 46) は，旱魃と飢饉の可能性を認めているがキャンプの説については懐疑的である。

(9) Osborne, R. "A Crisis in Archaeological History? The Seventh Century B.C. in Attica" *B.S.A.* 84 (1989) 297-322.

(10) Snodgrass, A.M. "Archaeology and the study of the Greek city" in *City and Country in the Ancient World* Rich, J. & Wallace-Hardrill, A. ed. London (1991) 1-23. ここで彼は，モリスの意見は自分の説を覆すものではないことを強調している。

(11) Foley, *op.cit*. 22-33.

(12) Coldstream, J.N. *Geometric Greece* London (1977) 133; Cavanagh, W.G. "Surveys, cities and

synoecism" in *City and Country in the Ancient World* Rich, J. & Wallace-Hardrill, A. ed. London (1991) 97-118；高橋裕子「初期鉄器時代におけるアテネとアッティカ」『史学雑誌』110-11 (2001) 36-62；Cf. Mersch, A. "Urbanization of the Attic Countryside from the Late 8th Century to the 6th Century B.C." in *Acta Hyp*. 7 (1997) 45-62.

(13) Schilardi, D.U. "The decline of the Geometric settlement of Koukounaries at Paros" in *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.* Ed. by Hägg, R. Stockholm (1983) 173-183.

(14) Coldstream, *op.cit*. 210ff.; Cambitoglou, A. et. al. *Zagora 2* (1988) 237-242；Vink, M. "Urbanization in Late and Sub-Geometric Greece: Abstract Considerations and Concrete Case Studies of Eretria and Zagora c.700 B.C." in *Acta Hyp*. 7 (1997) 111-141.

(15) Snodgrass (1977) 22ff. 彼は暗黒時代に建設された集落のいくつかが，この時期になって近隣のより大きな集落に統合されてポリスを形成したと考えている。

(16) Mazarakis Ainian, A. *From Rulers' Dwellings to Temples -Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700B.C.)- SIMA* 121 (1997).

(17) Coldstream, *op.cit*. 317ff. この後クレタのコモスやパロスのककナリエス等でも古い時期から祭祀行為があったことが発見された。

(18) Shaw, J.W. "Phoenicians in Southern Crete" *A.J.A.* 93 (1989) 165-183; Shaw, J.W. ed. *Kommos* Princeton 1995〜.

(19) Buschor, E. & Schleif, H. "Heraion von Samos: Der Altarplatz der Früzeit" *A.M*. 58 (1933) 150.; Kyrieleis, H. "The Heraion at Samos" in *Greek Sanctuaries: New approaches* Marinatos, N. & Hägg, R. ed. London (1993) 125:53.；拙稿「ギリシア暗黒時代の神域—キプロスとの比較—」『九州産業大学国際文化学部紀要』5 (1996) 97-111.

(20) これは首長の家屋とも考えられている。Mazarakis Ainian, *op.cit*. 58.

(21) Snodgrass, (1977) 24; Schachter, A. "Policy, Cult, and the Placing of Greek Sanctuaries" in *Le sanctuaire grec* (*ENTRETIENS*37, 1991) 1-64.

(22) 発掘者はミケーネ時代のものと考えていたが，ブレゲンはジオメトリック期のものではないかと疑義を唱えた。プロマーはこれに反論したが，ドレルップはブレゲンの説を支持して7世紀であるとし，その後ライトは前8世紀後半，アントナッチオは前7世紀後半という論を発表している。See Tilton, L. "Architecture of the Argive Heraeum" in *The Argive Heraeum I* Waldstein, C. ed. N.Y. (1902) 109f.; Blegen,C. *Prosymna: The Helladic Settlement Preceding the Argive Heraeum* London (1937) 19ff.; Plommer, H. "Shadowy Megara" *J.H.S* 97(1977) 75-83; Drerup, H. "Griechische Baukunst in geometischer Zeit" in *Archaeologia Homerica* II-O 57ff.; Wright, J.C. "The Old Temple Terrace at the Argive Heraeum and the Early Cult of Hera in the Argolid" *J.H.S.* 102 (1982) 186-201; Antonaccio, C. M. "Terraces, Tombs, and the Early Argive Heraion" *Hesp*. 61 (1992) 85-105；拙稿「プロシムナのミケーネ墓崇拝とヘライオン—ギリシア暗黒時代のアルゴリスに関する一考察—」『九州産業大学国際文化学部紀要』11 (1998) 85-102.

(23) アルゴスという名称は，アルゴス市，ミケーネを含むペロポネソス北部全域，あるいはギリシアの総称として用いられることがある。またアルゴリス地方は，現在ではエピダウロスまでを含む半島北東部全域のことをいう。本稿では「アルゴス」は市もしくはポリス，「アルゴス平野」は北はミケーネ，東南はアシーネ，西南はレルナまでを指し，しばしば「アルゴリス」という名称をほとんど同義語として用いている。Cf. Morgan, C. & Whitelaw, T. *op.cit*.

(24) 有名なものとしてヒュシアイの戦い（前669/8年ころ：Paus. 2. 24. 7)，テュレアの戦い（前550年前後：

Hdt. 1. 82)，セペイアの戦い（前494年：Hdt. 6. 76-83）がある。なお，ヒュシアイの戦いについては本文で後述するように，ホールの説が正しいとするのであれば，捏造された戦いもしくは年代が大きく異なることになり，また初期スパルタの領土や歴史についても再考を余儀なくされよう（古山正人「テュレアティスをめぐる問題」日本西洋古典学会第53回大会口頭発表　於広島大学　2002. 6. 8.)。

(25) Paus. 2. 36. 4.

(26) Hdt. 6. 127; Aristot. *Pol*. 1310b; *FGH* 90 F35; Paus. 6. 22. 2; Strb. 8. 358, 376. フェイドンについては，Tomlinson, R.A. *Argos and the Argolid* London (1972) Chap. 7 に詳しい。

(27) Kelly, Th. *A History of Argos to 500 B.C.* Minneapolis (1976). 彼はアルゴスの繁栄は前8世紀後半のみであるとして，論を進めている。アルゴスを過大評価するものとして批判されることが多いものの，筆者は再考の余地があるのではないかと考えている。

(28) Frödin, O. & Persson, A.W. *Asine -Results of the Swedish Excavations 1922-1930-* Stockholm (1938) *passim*. esp. 47, 151, 334, 437.

(29) 完全に無人でなかったことはその後の発掘で明らかとなったが，町としての繁栄はヘレニズム時代になってからのことであった。Rafn, B. *Asine* II *-Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974* Fasc.6- Stockholm (1979)；馬場恵二『パウサニアス案内記（下)』岩波書店（1992）383.

(30) Wells, B. "Apollo at Asine" *Pelopon. Suppl.* 13 (1987-88) 157-61; *idem*. "The Asine SIMA" *Hesp*. 59 (1990) 157-61.

(31) Courbin, P. "Une tombe géométrique d'Argos" *B.C.H.* 81 (1957) 322-386.

(32) Aupert, P. "Argos aux VIIIe-VIIe siècles; bourgade our métropole?" *A.S. Atene* 60 (1982) 21-32. 彼は，アルゴスはすでに都市化していたとするケリーの論をここで批判している。

(33) Hägg, R. "Geometric Sanctuaries in the Argolid" *B.C.H. Suppl*. 22 (1992) 9-23; Tomlinson, *op.cit*. 200-220.

(34) Vollgraff,. W. *Le sanctuaire d'Apollon pythéen a Argos* Paris (1956) 7-49.

(35) Hägg, R. *Die Gräber der Argolis* Boreas 7-1 (1974) 136ff.; *idem*. "Burial customs and social differentiation in 8th-century Argos" in *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.* Ed. By Hägg,R. Stockholm (1983) 27-31.

(36) de Polignac, F. *La naissance de la cité grecque—cultes, espace et société VIIIe—VIIe siècles*—Paris (1984) Eng. Tr. Ed. *Cults, Territory, and the Origins of the Greek City-State* tr. by Lloyd,J. Chicago (1995).

(37) Markin, I. "Review of Polignac" *J.H.S.* 107 (1987) 227-28; Sourvinou-Inwood, Ch. "Early sanctuaries, the eighth century and ritual space: fragments of a discourse" in *Greek Sanctuaries: New approaches* Marinatos, N. & Hägg, R. ed. London (1993) 1-17. ポリニャックが前8世紀以前の神域をあいまいなものでしかなかったということについて後者は強く批判している。

(38) 彼の "extra-urban" 理論についての是非はともかく，アルゴスによるヘライオン大テラス造営はケリー以来多くの研究者が当然のこととみなしていた。ポリニャックはアルゴスを最初期から強大であったという考えを強化した点で，多くの研究者に受け入れられた。しかし，アルゴスを過大評価することについての警告はトムリンソン，オペール，フォリーらによって出されている。Kelly, *op.cit*. 62-68; Wright, *op. cit*. 198f.; Whitely, J. "Early States and Hero Cults: A Re-Appraisal" *J.H.S.* 108 (1988) 173-181; Morgan & Whitelaw, *op.cit*. 84; Antonaccio, *op.cit*. 103ff.；拙稿（1998）98f. *Cf*. Tomlinson, *op.cit*. 70: Aupert, *op.cit*. 31; Foley, *op.cit*.

(39) Strφm, I. "The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th-Early 6th Cent. B.C.) -The Monumental Architecture-" *Acta Arch*. 59 (1988) 173-203.

(40) *idem*. "The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th-Early 6th Cent. B.C.) -The Greek Geometric Bronzes-" *P.D.I.A.* 1 (1995) 36-127.

(41) Hall. J.M. "How Argive Was the 'Argive'Heraion? -The Political and Cultic Geography of the Argive Plain, 900-400 B.C.-" *A.J.A.* 99 (1995) 577-613.

(42) ホールは，アシーネ人がドリュオペス人であり，ドリュオペス人はヘラクレスとマリス人によってドーリスから追われてきたというヘロドトスの記述（Hdt. 7- 83, 43)，ドリュオペス人は海賊であったというフェレキュデスの断片（*F.G.H.*3 F19)，そしてツァンガーの「前一千年紀はじめのアシーネの地形はいまとは大きく異なっており，外からは見えない港を有していた」という三点から，アシーネは海賊の巣窟であったためにアルゴスが討伐したと考えている。またこのアルゴスによるアシーネ破壊を，ホールはアルゴスの勢力拡大とは無関係としているのだが，これは明らかに矛盾している。See Zangger, E. "The Island of Asine: A Palaeogeographic Reconstruction" *Op. Ath.* 20 (1994) 221-239.

(43) 1962年にティリンスの城壁近くから前7世紀の碑文が出土した。これにはティリンスが共同体独自の決定権を有している内容が書かれており，ホールはペルシア戦争でテルモピュレーにミケーネが80(Hdt.7. 202)，プラテーエにはミケーネとティリンスあわせて400の兵を出していることから，前7世紀から前5世紀前半まで両ポリスとも独立を保っていたと考えた。しかし，前7世紀以降アルゴスは人口の減少やスパルタとの抗争で弱体化しており，その期間近隣諸国がアルゴスから独立していたことは当然かと思われる。See Verdelis, N., Jameson, M. Papachristodoulou, J. "Archaikai Epigraphai ek Tirynthos" *Arch. Eph.* (1975) 150-205.

(44) 両地を結ぶ道は青銅器時代に作られていたもので，「テラス神域」の近くにはトロス墓（王族の墓？）がある。またプロシムナ一帯には岩室墓（ミケーネ時代の集合墓）が50基以上発見されており，ミケーネ時代にはここは王国にとってもかなり大規模な墓地であった。これらの祠については，さらに検討を要する。See Blegen, K. "Prosymna: Remains of Post-Mycenaean Date" *A.J.A.* 43 (1939) 410-44.; Cook, J. M. "Mycenae 1939-1952: the Agamemnoneion" *B.S.A.* 48 (1953) 30-68.

(45) *e.g.* Markin, I. "Territorial domination and the Greek sanctuary" in *Religion and Power in the Ancient Greek World* BOREAS 24 Uppsala (1996) 75-81. マルキンは，辺境神域はその起源は「辺境」ではなかったとしているが，すべての辺境神域にあてはまるとは思えない。

(46) 暗黒時代各期（SM＝亜ミケーネ期c.1125-1050，PG＝原ジオメトリック期1050-900，EG＝初期ジオメトリック期900-850，MG＝中期ジオメトリック期850-760，LG＝後期ジオメトリック期760-700）の墓数を見ると，LG期のアルゴスが60近くあるのに対して同時期のティリンスは20弱，ミケーネは一桁にすぎない（Foley, *op.cit.* Table 7-9)。

(47) たしかにヘロドトスは，テュレアとセペイアの戦い（Hdt. 1. 82, 6.76-83）について述べているだけである。しかし，第一巻82節には「(アルゴリスの）西方，マレア岬に至るまでの地域も，本土にある部分はもちろん，キュテラ島はじめその他の島々をも含め，アルゴス領だったのである(松平千秋訳)」，またフェイドンについても第五巻127節で「度量衡を制定した人で，またエリス人の競技委員を廃して自らオリュンピアの競技を主宰するという，他のギリシア人にはとうてい真似のできぬ専横を敢えてした人物(同上)」と，古い時代のアルゴスがかなり大きな勢力を有していたことは周知の事実のように記している。

(48) Hall, J. "Alternative Responses within Polis Formation: Argos, Mykenai and Tiryns" in *Acta Hyp.* 7 (1997) 89-109.

(49) *idem. Ethnic identity in Greek antiquity* Cambridge (1997).

(50) Emberling, G. Review of J. Hall "Ethnic identity in Greek antiquity" *A.J.A.* 103 (1999) 126-7.

(51) 前8世紀の祭祀活動を扱う場合，ギリシア各地に見られる英雄崇拝もしくはミケーネ墓崇拝という行為

についても言及しなければならない。しかし，この行為については，①神崇拝の副次的行為，②現実の先祖供養（崇拝），③偶発的な行為，④土地所有権をめぐっての英雄（架空の先祖）崇拝など，いくつかの可能性があり，また地域によって性格が異なっていたのではないかと考えている。このため本稿では触れることを避けたが，祭祀活動をより鮮明にする中でこの問題に対する答えを見出せるのではないかと期待している。See Coldstream, J.N. "Hero-Cults in the Age of Homer" *J.H.S.* 96 (1976) 8-17; Hadzisteliou-Price, Th. "Hero-Cult and Homer" *Hist.* 22 (1973) 129-44; Morris, I. "Tomb cult and the 'Greek Renaissance': The Past in the Present in the 8th Century BC" *Antiquity* 62 (1988) 750-61; Antonaccio, C. "Contesting the Past: Tomb Cult, Hero Cult, and Epic in Early Greece" *A.J.A.* 98 (1994) 389-410; *idem. An Archaeology of Ancestors -Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece-* Lanham (1995); 拙稿（1998）.

(52) ヘッグが編者（の一人）となっている書には，*Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.* Stockholm (1983), *Early Greek Cult Practice* Stockholm (1988), *Greek Sanctuaries -New Approaches-* London (1993), *The Role of Religion in the Early Greek Polis* Stockholm (1996), *Ancient Greek Cult Practice from the Archaeological Evidence* Stockholm (1998), *Ancient Greek Hero Cult* Stockholm (1999) などがある。

(53) Strøm, I. "The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th- Early 6th Cent. B.C.) -Bronze Imports and Archaic Greek Bronzes-" *P.D.I.A.* 2 (1998) 37-125.

(54) シュンポジオンが，フリギア（都ゴルディオン）からもたらされたのではないかの指摘はすでに以前からされている。DeVries, K. "Greeks and Phrygians in the Early Iron Age" in *From Athens to Gordion: The Papers of a Memorial Symposium for Rodney S. Young* DeVries, K. ed. Philadelphia (1980) 33-49; Tomlinson, R.A. "The Chronology of the Perachora *Hestiatorion* and its Significance" in *SYMPOTICA -A symposium on the Sumposion* Murray, O. ed. Oxford (1990) 95-101.

(55) *e.g.* Burkert, W. *The Orientalizing Revolution -Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age* Harvard (1992) tr. by Pinder, M.E. & Burkert W.; Kopcke, G. & Tokumaru, I ed. *Greece between East and West: 10th-8th Centuries BC* Mainz (1992).